

「デジタル化による咬合再構成の現状と将来 ～アナログ時代と不変な事と変わる事～」

抄 録：

近年、デジタル化が進み、日常臨床で多くの臨床家が歯科用コーンビームCTやCAD/CAMシステムを利用するようになってきている。最近では口腔内スキャナーを用いた補綴のデジタルワークフローが注目され、臨床応用されているが、撮影方法や精度に関する検証データ報告は少ない。また、歯科用コーンビームCTは、インプラント治療や歯内療法に用いるだけでなく、矯正治療や修復補綴治療において、咬合再構成する際の重要な診査・診断機器となっている。

日常臨床で常に悩むことは「治療のゴール」を最初にイメージすることができるか否かである。術前に視覚化され解析できるデジタルデータがあれば、硬組織はもちろん、軟組織や顎関節との関係も含めて検討できるだけでなく、ゴールへのイメージを経験値の高い術者に近づけ、歯科技工士とより良い連携ができると考えている。

そこで今回は、咬合再構成に関する要素を大きく3つ取り上げ、その現状と将来について発表する。